

ikeekids コミュニケーション 号外

気になる子ども達と通常の子育てや教育の中での支援

平成17年に発達障害者支援法が施行されてから、発達障害についての理解が少しずつ深まってきました。自閉症行動特徴の一般母集団での分布図を見て下さい(図)。これはSRSスコアを表にした物で横軸は自閉症の特性の強さ、縦軸は人数になります。

大体80点くらいから自閉症の診断がつく人達が多くなると言われています。50点から80点くらいの人達は、通常よりも少しだけこだわりや対人関係の苦手などが目立ちますが、必ずしも診断がつく人達ばかりでは有りません。

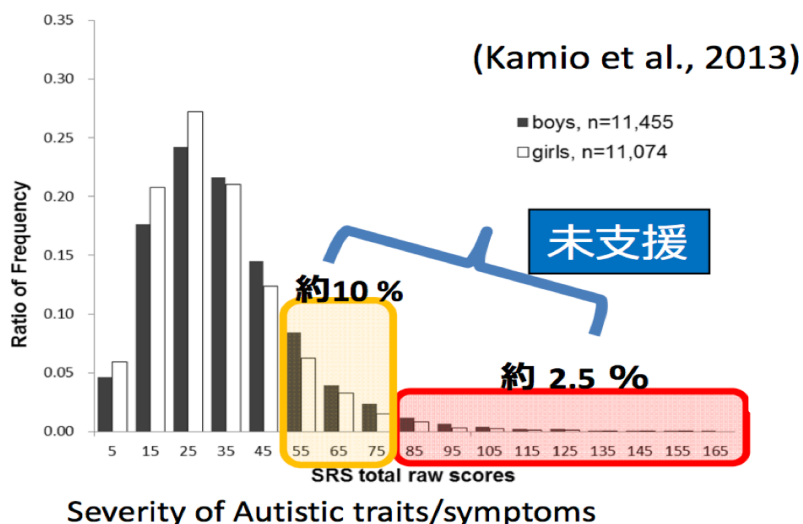
また、50点未満の人達はほとんど診断がつくことはないのですが、全く特性が無いわけでは有りません。誰もが対人関係で得意苦手があったり、多少のこだわりがあ

たり、見通しが立たないと不安になったりするわけで、50点未満の人達でも生きにくい環境に置かれれば、不適応を起こしてきます。このデータが発表されてから解ったことは、自閉症などの診断が一度ついたら一生変わらないわけではなく、非常に適応しやすい環境に置かれると一度診断がついていても診断基準を満たさないほど安定する人達もいる。一方で、診断がつかない程度と言われても、適応しにくい環境に置かれると、診断がつくほど不適応の症状が出てきます(顕在化)。

ですから幼稚園で何も無くても小学校に上がってから、中学や高校、大学になってから不適応が顕在化してきて登校出来なくなったり、学校や職場で学習や仕事を適切に出来なかったり、友達や教師、同僚や上司とうまくやってゆけないなどの問題がでてくる場合があります。強い特性を生まれつき持つ人達の場合は、乳幼児健診や様々な場面で周囲も気づき、現在では何らかの支援が始まることも多いのですが、診断域下の場合は一見まったく問題が無いように見えるので、どうしても支援が遅くなり、不適応が顕在化してから初めて支援が始まることが多いようです。

では支援とはどのようなものなのでしょうか。もし、視覚支援の一つである信号機が突然つかなくなってしまうたら危険です。トイレや出入り口などの案内がなくなったら困ります。言葉の意味が十分にわからない子ども達に、やって見せたり絵や写真で示すとわかりやすくなります。見通しが立たないと不安になりやすい子ども達に、言って聞かせても伝わりません。

全国の通常学級の児童生徒 にみられる自閉症的特性の分布



Severity of Autistic traits/symptoms

どのような課題をどのようにすれば出来るのか、伝えることが必要です。同様に、言葉の理解や状況の把握が未熟な子どもが、物を捨てたとき「物を捨ててはいけません」と怒っても伝わりませんが、「ゴミ箱に入れようね」と言うと伝わる場合があります。子ども達は親の前で出来ない場面を見せるのを嫌います。自信が無いときにおちゃらけてやり過ごす子ども達も居ます。このようなときにおちゃらけることを叱っても、子ども達は自信を無くすだけです。具体的なやり方を伝えるなどの工夫が大切です。

子ども達の特性を理解して早期に支援に繋がると、本当にスムーズに行くケースがあります。ですから診断の有無が大切なのではなく、何か困りのありそうな子ども達がいた場合、その困りの原因となる特性を理解することが大切です。支援の方法をする上で診断は大切ですが、診断にとらわれることなく、不適応な問題があった場合には適切なアセスメントをして、子ども達の特性に合わせた支援を考えて上げることが大切です。これらのことは目の悪い人にメガネを処方するイメージに似ておりよく例えられます。

近年、発達障害のケースが増えていると言われることがあります。昭和の半ばは幼稚園から帰っても地域に子ども同士でたくさん遊ぶ場がありました。遊びもゲームやビデオもなく、子ども同士が関わって遊ぶ事が多かったように思います。また、睡眠についても小学校低学年の標準睡眠時間は10時間程度、高学年の標準睡眠時間が9時間程度とされています。適切な睡眠をとることも脳の発達や適切な行動に大きな影響がある事が解っています。私自身、夜8時になると寝るように言われていました。現在は社会状況の変化や塾などの勉強、さらにはゲーム、YouTubeなどもあり睡眠時間も短くなっています。

様々な社会的な状況から人が本来必要とする人との関わりや昼夜のリズムに合わせた生活が崩れていることなどで、診断域下にあるようなタイプが、より不適応を起こしやすい環境ができてしまったように思います。よく遊び、早寝早起き、朝ご飯もしっかり摂るなど本来人が当たり前に行っていた環境を、もう一度考え直すことも大切なように思います。

外岡 資朗

